

0から1を作るためにできること

さかえ だいご
榮 大吾

周防大島町集落支援員

ひじき漁師（沖家室ひじき生産者）

榮大吾氏は、金融機関での業務を経て、2018年から山口県の周防大島（人口：16,132人 [2019年3月31日現在]）にて集落支援員を務めながら、ひじき漁師をはじめ、数々の業務を行っている。

む島での暮らしには多くの社会課題も山積していると思われたが、課題に優先順位付けをするのは意味がないという話から始まる。（聞き手：青山竜文）

図1



（周防大島町 HP より）



写真1 周防大島町
（写真提供：榮大吾氏）

まず、「周防大島だからこそ味わえること」として挙げてもらったことを最初に紹介しておきたい。

- 高度経済成長期の企業勤めを経験した人たちのUターンが多く、自治会の核になっておりとても頼もしい点
- 個人事業や家業、自給的生き方の師匠が多くいらっしゃる点（データでも個人事業や家業の割合が高い）
- 本籍地人口が5万人程いると言われており、住民の多くが広いネットワークを持っている点
- 海と山の暮らしのいいところ取りができる点

このあたりの魅力を念頭におきつつ、以下のやりとりを御覧いただければと思う。高齢化、過疎が進

1. 0から1をすること

—周防大島において、少子高齢化は大きな社会課題だと思いますが、実際にはさらに個別のテーマがさまざまあると思います。どのような課題の優先度が高いと思われますか？

榮：こうした際にまず課題が取り沙汰されるのは各自治体を作る総合計画の弊害ですが、自分はそもそも課題に目を向けないようにしています。課題自体は数えあげればキリがないので、今後の集落活動を維持していくためには何が必要か、今何ができるか、今あるものは何か、に着目して活動しています。

少子高齢化自体は課題ではなくて「今後の経済活動の前提」です。現在は人口規模が明治期前後に“戻る”過程である、という捉え方をしています。1800年代後半から2000年までの100年での人口増加がある種異常なので、そのなかで優先的な課題解消などという考え方をすると更に財政は悪化します。一質問が悪かったかもしれませんが。それでは集落活動を維持していくには、どういう考え方や活動が必要でしょうか？

榮：自分は現状、「個人事業主や家業の芽を再び育て、組合を作る（明治期前後の就業様態を参考にしつつ、地域内の各事業を適切な事業規模に収斂することができるかを模索する）」ことに最も力を入れています。

高度経済成長期以降、人々の労力が「仕組みを作る」「事例を横展開して規模を拡大すること」ことに割かれ、優秀な人や企業ほど「課題を抽出し、そ

【榮大吾氏のプロフィール】

1989年生まれ。神奈川県横須賀市出身。2012年株式会社日本政策投資銀行入行、2018年山口県の周防大島町へ移住。2020年 田舎チャレンジャーラボ創設、2021年 合同会社さかえる設立、沖家室ひじき商品化&販売スタート。周防大島町の移住定住等地域振興、沖家室ひじきの生産販売、紫ワインのマーケティング、オンライン村・田舎チャレンジャーラボの運営などを業務として活動中。

れを潰し効率化を図ること」に労力を割くようになりました。「0から1を作る」よりも「1を100にする」ことを優先した方が合理的だった時代です。しかし、人口規模が明治期以前の水準に戻る場合、これ以上の資本主義的な利益拡大は見込めません。かつてのように「0を1にする」作業を地道に繰り返しながら経済全体の縮小・撤退を適切に行うことが個々の生活維持の観点では合理的だと思います。にもかかわらず、引き続き「1を100にする」作業ばかりが現在行われており、現場で「0から1を作る」人員が圧倒的に不足しています。

一周防大島でもそういう状況でしょうか？

榮：周防大島の就業形態は個人事業や家業が就業者のおよそ1/3を占めるという状況で、昔ながらの就業形態が未だ残っている場所です。1950年代から農業漁業以外の産業がなく仕事がないと言われて久しい島なのですが、高度経済成長に付いていかなかったからこそ残っている個人事業の文化が多数あります。

2. 集落支援員としての立ち位置。

なぜひじき漁師となったか？

一集落支援員としての活動とその他の業務とのバランスについて教えてください。

榮：集落支援員としては、地方公務員的動きというよりも、「半官半民の個人事業主」としての活動を心がけています。「地域において最も必要だと思う部分を個人でまず補完していくこと」が私の使命です。その意味では銀行員時代の考え方や生き方、働



写真2 集団支援員が管理を手掛ける「島暮ら荘別館」
(写真提供：榮大吾氏)

き方をそのまま続けています。

現在は町長以下役場の方々に趣旨を説明したうえで、どちらかというと「民間寄り」の活動割合を多くしている状況です。公務員もかつて農繁期などに家業を手伝うことが当たり前でした。地方公務員法でも兼業が禁止されていない由来でもあると理解しています。かつては公務員であったとしても家業的、個人事業主的生き方が主流でした。

そもそも私自身が移住を決めた際、「足腰立たなくなるまでずっとできる生業」を見つけて生きていきたい、という思いがあったこともあいまって、1次産業に従事する70代前後の先輩方の生き方がとても魅力的に見えました。

一榮さんの仕事のなかでも、沖家室ひじきの収穫と加工に関わる生産過程に関する記述は非常に感銘を受けました (<https://www.hijiki.online/process>)。どのような経緯で漁師を始めましたか？

集落支援員として沖家室島で活動するなか、ひじき漁の師匠とは2018年の9月にあったのですが、翌年4月に師匠が沖家室の自治会長になり、何度もやりとりするようになりました。ただ、本当に怒られてばかりでした。

徐々に関係も深まるなか、1年近く経った2019年8月、古民家の片付けを何人かでやっていたら、師匠が突然見に来て「いろいろ見てやるよ」という感じになり、変化が生じてきました。翌月、山口県周南市から来てくれた小学生向けに地域づくりの講演会をしたあと、師匠は自分が釣り好きだったことを覚えていてくれて、磯釣りにも誘ってくれました。

その後、師匠は地元のワークショップにも参加してくれたのですが、後日「ああいう地元とよそのやつがうまいこと交流すんのはいいよな」とボソッと言われ、本当に嬉しかったことを覚えています。関係を深めるなか、師匠の本業であるひじき漁に誘われ、2019年12月頃から本格化していきました。そし

て、漁の休憩中にふと「お前、インターネットでひじき売って見たらどうだよ」と言っていたことが商品化のきっかけとなっています。

—インターネット販売を始めてからの気付きはありますか？

榮：ひじきの場合、一般的な D2C (Direct to Consumer：製造者が消費者に自社の EC サイトなどを通じ、直接製品販売する形態) と異なり、「個別連絡」「地道なお手紙でのやりとり」「コミュニティのなかで関係性を作って販売」などのドブ板営業が基礎となっています。

ネット上で直売するが Web では売らない、と決めたことが今のところ順調に進めている要因の一つです。世間では「売り方」「見せ方」「販路の作り方」などが D2C 成功に必要なこととされていますが、その前に「商品そのもののクオリティ」が大切だと思っています。師匠ご一家の積み重ねていた年月をお借りしているからこそその結果です。



写真3 ひじき漁に向かう船
(写真提供：榮大吾氏)



写真4 沖家室ひじき
(写真提供：榮大吾氏)

3. 事業を進めるうえで大切なこと

—過疎地域のなかで収益を継続的にあげていく事業を作るには何が重要でしょうか？

榮：自分は今、「商売づくりは、マニュアル化、類

型化、体系化できるようなものではない」ということを体感しています。

特に重要だと思っていることを幾つかお話しします。一つ目が「希少性の高いものに価値がつくということ」を体感し、価値の交換を重ねること」です。たとえば若い人が多いコミュニティでは Wi-Fi のセットができることには価値はありませんが、お年寄りグループのなかではできる人が少ないので価値の高いスキルとなります。力作業も同様です。農作物や海産物についても産地では安いですが、地域外では高い価値が認められます。そのあたりを頭で理解するより身体にしみつかせるイメージで把握してきました。

二つ目が「お借りできるものは使わせていただいたくこと」です。力仕事ができることやスマートフォン、パソコンができることと引き換えに、知らないことをどんどん教えていただいています。責任を持って孤独に事業を進める必要はあるのですが、自分一人の力では何もできない、ということを実感し、多くの人の知恵や力を部分的にお借りしています。

三つ目が「固定費が高くないため、基本的に何度でも失敗することができるので、試行が重ねられる」ことです。失敗の過程自体は地域内では見せず、ワークショップなどで遠方から人を呼ぶなどの「分かりやすい結果」を出して、信頼を重ねています。

そして、「人口規模がなくても、遠くから人を呼ばなくても、販路などを開拓せずとも、コミュニティや他者との関係を大切に、濃いリピーターがいれば商売が成り立つ」という事例を、身をもって体感し、参考にさせてもらっています。例えば橋の事故で観光客が途絶えたときにも地元向けの食堂や地元住民にカンボジア料理屋は繁盛していたということなどがその一例かもしれません。

4. 官民のパートナーシップのあり方

—そうした暮らしを営むなか、官民でのパートナーシップのあり方についてはどう思いますか？

榮：結論としては「官民連携を進める」というよりも「官民の役割分担をより明確化し、お互いの領域に安易に立ち入らない」ことが今後必要になってくると思うのです。人口規模が右肩上がりの世の中では公共の役割が発揮しやすく、国全体の利益の平準化にも大きく寄与していたと思いますが、今後は前提条件が異なるので、「公共に何かを期待すること」は少々酷な話になると思います。むしろ「本来、自助共助で足りるものを公助しすぎている」側面があるのではないかと感じます。

現場は治安維持や災害対応など最低限のインフラを支えることで精一杯ですし、それ以上のことを求める必要はないと思います。私が移住してきた際、公共的立場の方からいただいた良かった言葉は「移住も起業も甘くない。補助金もあるけれどそんなものには頼るな」というものです。

役所というのはあらゆる場面で批判の対象になりますが、周防大島に関しては非常に少ない職員数でより大量の業務をこなしており、とてもポジティブに感じています。

行き過ぎた自己責任論は危険ではありますが、何でもかんでも公共におんぶに抱っここの現状こそ打開すべきものであり、自助・共助・公助の「自助・共助」を私たち一人一人がもっと考え直さねばならないと思っています。本来行政とはもっと不作為的であるべきで、地域とは住民1人1人が作っていくものであるという自覚をしなければなりません。

今の私が暮らしている環境のように、多くのものが「自助・共助」で回っている集落で生きていると、「公助」が必要なものは実はあまり多くないのでは、という感覚になってくるのです。ゆえに、私は今後

の行政で必要となるのは3つだと考えています。

- (1) 課題に目を奪われるのではなくバランス感を欠いた多少の最良的対応をすること。
- (2) 行政自らふるさと納税で稼ぎ、財源を住民と共に稼ぐこと。
- (3) 治安維持にかかる部分など、最低限の公的業務のみ岩として残しておくこと。

5. 返報性について

—事業や行政についての冷静な意見を伺う一方で、現在の島の暮らしにおける充実感も伝わってくるのですが、最後に、日々の暮らしのなかでどのような点に「幸せ」を感じているか、教えてください。

榮：自分が感じる幸せというのは、「自分が成長している実感があること」、「回りの人と良好な関係が結べていること」、「所属するコミュニティに貢献できていること」によりもたらされていると実感しています。そして、村での暮らしは比較的分かりやすくそれらを感じることができ、これは有難いことです。ただし、一定の参入障壁もあると思っており、その障壁を越えるためにも、「自分ができること」を常に考えていくことが重要です。それは「返報性」という言葉でも言い換えることができますが、そのあたりを移住希望者の方々にも伝えていきたいと思っています。



写真5 榮大吾氏
(写真提供：榮大吾氏)